

授業実践例

【題材名】 音楽を深く味わいながら歌おう ～『La serenata』～

【題材について】

のびやかに声を出せるイタリア語の名曲であり、豊かな声を目指して取り組むことができる作品である。また、転調がすばらしく、曲の構造を知り、それを表現に生かし、音楽を深く味わうことができる。

【教材名】

- 「La serenata」(G.A.チェザーレオ：作詞／堀内敬三：訳詞／F.P.トスティ：作曲)教科書 p.25
- 「ONGAKUをふかめよう 1. イメージに合った歌い方を目指そう」教科書 p.6
- 「ONGAKUをふかめよう 4. 音楽の構造と表現とのかかわりを深掘りしよう」教科書 p.9
- 「楽典 調号と主音、関係調」教科書 p.117

学習の流れ

第1時

①日本語の訳詞で歌う

まずは、堀内敬三訳の日本語で歌い、あまり細かいところにこだわらずに曲全体の感じをつかむ。その際、日本語の意味の確認を行う。

②セレナータについて考える

恋人の窓辺で、夕べに歌う愛の歌である「セレナータ」について考える。いろいろなセレナータを鑑賞し、「歌垣」などの人間の根源である求愛行動における音楽について考察する。

第2～3時

③イタリア語をつけ、リズム読みをする

まず単語ごとにイタリア語を読み、引き続き歌詞をつなげて朗読する。その際、言葉の抑揚をしっかりつけながら取り組む。その後、リズム読みに取り組み、言葉のニュアンスとリズムが一致していることに気づかせる。

④イタリア語をのせて歌唱する

イタリア語で歌唱する。早口言葉になるところを重点的に練習する。

⑤のびやかに歌唱する

教科書p.6の「ONGAKUをふかめよう 1. イ

メージに合った歌い方を目指そう」を参考に、レガート唱に取り組ませることによって、より豊かな声が出るようにする。

⑥鑑賞する

プロの歌手の演奏を、レガートを意識しつつ鑑賞し、自らが歌うときの参考にする。

第4時

⑦音程に注意しながら歌唱する

10、12、19小節目などに出てくる「臨時記号」の音は、曖昧になりがちなので丁寧に音を確認する。この作品では曲中に「臨時記号」がとても多いことから、作曲家の深い意図を感じ取りたい。

⑧階名唱に取り組む

より正しい音程で歌うために「階名唱」に取り組ませる。それも「移動ド」で歌うことによって、より音楽が見えてくる。10小節目では、変化音を「di」と読み、**譜例1**となる。また12小節目は、g-mollへの転調を意識し**譜例2**「B:」でもよいが、一瞬の変化なので「ファ#」＝「fi」を使い、**譜例2**「Es:」を歌う。

譜例1



譜例2



第5時

⑨音楽の構造を知る

教科書p.9の「ONGAKUをふかめよう 4. 音楽の構造と表現とのかかわりを深掘りしよう」と教科書p.117の「楽典 調号と主音、関係調」を参考にして、曲の構造を分析する。第4時の移動ドによる階名唱を再度確認することによって、18小節目からはg-mollに、26小節目で主調のEs-durに、28小節目からはなんとGes-durに、30小節目でEs-durに帰ったかと思ったら、最後の36小節目でAs-durに転調し、38小節目でEs-durに終止することを理解させる。

⑩緩急法(アゴーギグ)をつけ、表現を工夫する

「La serenata」の歌詞は「セレナータよ、飛んで行きなさい 一人でいる私の愛しい人のもとへ」(6～9小節目)と始まるが、西洋の窓辺というと2階以上を思い浮かべるため、上に向かって歌っているであろうにもかかわらず、メロディーラインは下降型である。これは「降りてきてよ!」という想いの表れなのかもしれない。そして「美しい頭をシーツの中にもたせかけている」というところでは、二つの変化音で艶っぽさを出している。一つ目の臨時記号は「頭 (testa)」という単語につき、二つ目は属調の平行調に上げられているが、続く

13小節目のピアノ伴奏にフラットがつくことで、まるで、相手を引き下ろそうとするかのように主調に引き戻されている。これは続く18～25小節目のところでも同様である。13、25小節目が、緩急法(アゴーギグ)によりたっぷりと歌いたくなるのは、そのような理由があることを理解し歌唱する。

⑪転調を知り、表現を工夫する

28、29小節目は、主調のEs-durから「下属調の下属調の下属調」のGes-durに転調している。普通の転調であれば「関係調」に行くはずなのに、三つも下の調に降りている。「3」と言えば、西洋では「完全」という意味がある。それもさらにppで注意をひく作戦には、「絶対降りてきて」という強い想いが感じられる。また、32、34小節目のフラットも情感豊かで印象的だ。そして、最後の36、37小節目で歌われるセレナータの歌声は、「下属調」に下げられていてだめ押しのようなのである。

第6時

⑫発表会をする

これまで学んできたことを生かし、独唱による発表会を行う。

⑬評価しあう

お互いに演奏を聴きあい、評価しあい、各自の演奏へのヒントとする。

参考文献

『音楽指導ブック]やんば先生の 楽しい音楽!』(岩本達明著、音楽之友社、2021年)

Q&A

Q.1 情感豊かな変化音や転調を歌唱指導する際の具体的なポイントを教えてください。

Q.2 お互いに評価させる際に、どのような点を重視させるとよいでしょうか？

A.1 まずは、臨時記号のついた音を見つけ出し、○で囲ませる。その後、臨時記号をつけた場合と、つけない場合を、実際に歌唱し、違いを感じさせると効果的である。

A.2 音の持つ指向性を感じて、正しい音程で歌っているか。音楽の構造を理解して、表現の工夫をしているかを重視させる。